

「遠征の資金集めや部員の獲得にも奔走。様々な苦勞の全てが僕の大きな財産です。」

今から半世紀以上前に創部され、その後廃部した岐阜大学ボート部を復活させた折原薫也さん。自らも全日本大学選手権大会出場を果たし、30名近くが所属する部活へと育て上げた。孤軍奮闘しながら部を牽引し続けたその情熱は、主将を譲った今も後輩の胸にしっかりと刻まれている。部の復活のため、共に奔走した千田隆夫教授も、折原さんのリーダーとしての統率力、調整力に一目置く。



岐阜大学ボート部前主将
おりはら ゆきや
折原 薫也 さん
岐阜大学医学部医学科5年

「岐阜大学ボート部」

昭和37年頃に創部されたが、19年ほど前に部員減少を受けて廃部。平成25年に入学した折原さんの働きかけにより、医学部ボート部として復活を遂げた。その後、全学の同好会を経て、全学の岐阜大学ボート部に昇格。現在の部員は28名（平成29年3月時点）。主な練習場所は岐阜県川辺漕艇場で、平日は大学構内で専用器具によるトレーニングを実施。週末には1時間かけて漕艇場に通い、練習に励んでいる。女子部員やマネージャーなども在籍。他大学と合同で年2回の合宿も行っている。平成28年度は、西日本医学生総合体育大会ボート競技男子ダブルスカル、中部学生新人選手権大会男子ダブルスカルで優勝するなど、着実に力を付けている。

平成29年3月	平成27年	平成26年	平成25年	昭和37年頃	平成10年	創部
部員28名で活動中	全学部共通運動部「岐阜大学ボート部」として活動を認められる	父兄を中心に後援会が結成される	全学の生徒が入部し、同好会「岐阜大学ボート部」発足	医学部ボート部を立ち上げる	廃部	創部



▲「ボートの魅力は、自分が風になったような爽快感」と話す折原さん。「4人乗りや8人乗りの時は、みんなの動きが合った瞬間の一体感が醍醐味の一つです」。

かけがえのない仲間を得て毎年インカレに出場。存続の危機を脱し、今では総勢30名近くに。

なんとか部を立ち上げるのもその後は苦勞の連続でした。高校生の時、水上を駆ける爽快感に魅せられてボートを始めた僕は、部の主将を務め、愛知県選抜として国体にも出場しました。夢だった小児外科医を目指して入学した岐阜大学でも、競技を続けようと思いましたが、ボート部は20年近くに廃部に。そこで、入学式後の説明会で、日本ボート協会の理事を務める千田隆夫先生に駆け寄り、「部を復活させたい」と想いをぶつけ、そこから全てが始まりました。

その後は苦勞の連続でした。部の復活には、人・物・場所が必要です。まずは川辺漕艇場の近くに住むボート部OBの横山厚志さんを訪ね、ボートや艇庫を貸してもらえようという懇願。その後、友人4人を誘ってなんとか医学部ボート部を立ち上げました。ただ、経験者は僕一人です。孤独な練習が続く、心が折れそうな時期もありました。

転機は2年目。ボート経験者が入学し、全学の同好会としても活動を開始したのです。ただ、試合に出るにはボートの購入費や遠征費などがかなりかかります。千田先生からの援助では足りず、父兄の後援会を作って支援を募ったり、船を運搬する

トレーラーを安く借り、自分で運転して全国を転戦したりしました。こうした苦勞の甲斐もあり、後輩と2人でインカレに出場。これを機にOB会からもボートを寄贈してもらおうなど、部としての手応えを徐々に感じられるようになりました。

部での貴重な体験を糧に立派な小児外科医を目指したい。大学では勉強も大切です。ボート一辺倒になってほしくないと思いついて、「ボートへの関わり方は人それぞれ」という方針を掲げています。漕手以外にも広報活動や、マネージャーとして頑張る人もいます。様々な関わり方を尊重できる部でありたいと思っています。

去年の8月には後輩に主将を引き継ぎました。さみしい気持ちはありますが、でも、いつかは退く時がきます。辛い幹部を中心うまく運営してくれていて、少し肩の荷が降りました。今後は僕が苦勞した分、後輩を影ながらサポートしていきたいですね。

ボート部では交渉や企画を自ら進め、困難にくじけないタフさも身に付きました。僕が目指す小児外科医は大変な仕事ですが、部での貴重な経験を糧に医師として頑張っていきたいと思っています。

部長を務める千田隆夫教授は、「ボートへの思いが人一倍強く真摯な性格。キャプテンに相応しいですね」と折原さんを評価する。「資金面の援助のほか、後援会の立ち上げなども助言しましたが、初志を貫き続ける彼の姿勢は本当に立派です。部をまとめ上げるための調整能力は、医師としても大いに役立つと思いますね」と将来にも期待を寄せる。



岐阜大学大学院医学系研究科 解剖学分野

千田 隆夫 教授

国際ボート連盟 (FISA) 国際審判員
日本ボート協会 (JARA) 理事・国際委員長・公認審判員

2008年北京オリンピック等、多くの国際ボート大会で審判員として活躍



主将を引き継いだ4年生の伊藤拓海さん(写真右)は、「すべて一人でやってきた折原さんは本当にすごい」と話す。2年生で若手のホープ、坂口敬大さん(写真左)は「普段は後輩にもいじられるくらい陽気。でも、ボートを漕ぐ時は別人です」と語ってくれた。

▲中部学生選手権でのダブルスカル(2人乗り競技)優勝のほか、折原さんは数々の大会で優秀な成績を取っている。



◀昨年はかつての部誌「艇身」も復活。数百部を印刷してOBや後援会の会員などに配布した。

